

2 大阪市教育局主催

2-1 「小学校区教育協議会－はぐみネット－」事業・学校元気アップ地域本部事業 合同実践報告会

日 程：令和2年1月21日（火）14：00～16：30

会 場：大阪市立総合生涯学習センター第1研修室

テーマ：「学校協議会等との連携」

内 容：基調講演／「これからの学校と地域

－コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進－」

特定非営利活動法人「まちと学校の未来」代表 竹原和泉

事例報告／「小中学校協議会から生まれた小学校薬物教室」

横堤小学校区はぐみネット（鶴見区）

「めざせ!! 地域と共にある学校」

瑞光中学校区学校元気アップ地域本部（東淀川区）

ワークショップ

大阪市では、小学校区における「小学校区教育協議会－はぐみネット－」事業のほか、中学校区においても学校・家庭・地域の組織的な連携のもと、地域社会全体で子どもを育てる「学校元気アップ地域本部事業」を実施しています。今後の両事業の推進に向け、事業関係者及び事業に関心のある方が、事例などを通して両事業の成果と課題を共有し、教育コミュニティづくりと学校教育支援活動についてともに考え交流する機会として開催しました。

【基調講演】

「これからの学校と地域－コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進－」というテーマで、特定非営利活動法人「まちと学校の未来」代表の竹原和泉さんによる基調講演がありました。横浜市立東山田中学校ブロック運営協議会会長として学校と地域の新しい関係づくりを推進された経緯や成果などを、具体例を交えてお話いただきました。

「なんのために学校に協力しているのか、と尋ねられたら私は『子どもの未来のために』と答えています。」と語る竹原さんは、子どもの未来とは子ども自身の将来であり、子どもは次の社会の担い手であるから社会の未来でもあるという考えで、そのために必要な大人の連携が、例えば地域学校協働活動やコミュニティ・スクールという仕組みになる、と話されました。日本各地にある『おらが町の学校』という意味の言葉は、社会総がかりで子どもにかかわるということを表しており、みんなで子どもたちを育てよう、学校を大事にしよう、という気持ちが込められた言葉で、「大阪弁では何と言いますか」との質問に参加者も口々に答えていました。竹原さんは地域が





協力して持続可能な仕組みを作り、それを継続していくことの大切さをわかりやすく話されました。

そうした仕組み作りに必要なのはプロセスの共有で、情報の共有から課題の共有、アクションの共有へと進んでいくと、小さな成功体験の共有につながるということでした。例えば竹原さんが関わる横浜市の東山田中学校区では、小・中学校の先生同士がランチタイムミーティングで情報共有をしていて、そこで地域に知ってほしい情報があることに気づき、地域と学校がどうしたら情報を共有できるかを考えた結果、コミュニティカレンダーが作られるようになりました。学校は年間の行事予定を提供し、地域コーディネーターは地域の情報を集め、両方を併せて載せているカレンダーはどの時期にどの団体がどのような活動をしているのかが一目でわかります。このカレンダーには参加者の多くが興味を寄せていました。

また学校運営協議会は、学校の活動や報告を承認する組織ですが、学校側の説明ばかりや委員の「言いっぱなし」ではなく、構成委員が当事者意識をもって熟議することが大切であるというご指摘がありました。承認は「OK」というよりも「Let's」、一緒にやっ払いこうという意味で、地域は学校の最大の応援団であり、辛口の応援団であってほしいとのことでした。また竹原さんが館長をしているコミュニティハウスは、赤ちゃんから地域の方までが集まる場になっていますが、わざわざその施設を作るのではなく、公民館や学校の中の空きスペースを活用しているだけだということで、工夫次第で地域の中に活動の拠点ができるという示唆がありました。

アクションの共有の例としては、中学校のキャリア教育の一環である中学校3年生の模擬面接が紹介されました。中学生にとっては人生初めての面接で緊張感いっぱい、そこに日頃はグラウンドゴルフなどをしている地域のおじさんたちがきちんと背広に着替えてやってきて面接をする。おじさんたちは日ごろの生徒の成績や行動を知らないで、目の前にいる緊張した3年生を先入観なしで見てくれて、最後に自分たちの班の生徒はみんないい子たちだった、と感想を述べてくださるので、大変好評な取組となっているということでした。

また地域の力と、地域行事などへの子どもの参画が、地域と学校の協働のための新しい視点となると言われていますが、これからの子どもたちに必要となるのは『学び続ける力を身に着けること』で、そのために大人たちが何をするか、先回りして準備しすぎた体験をさせるより、失敗してもいいから子どもと一緒に作り上げる体験をさせることが大事だと話されました。

学校と地域の関係として、災害のあった地域で学校が避難所になった事例を紹介されました。避難者の駐車場として運動場を提供してほしいという申し入れに対して、学校側は災害が収まった時の児童生徒の活動場所として運動場は提供できないという考えでした。日頃から学校と地域が連携し合える関係だったので話し合いができ、学校の要望が理解されて避難所が円滑に運営され、教育活動も通常の状態に速やかに戻すことができたということでした。聞いていた参加者も自身の地元で起こりうる可能性に思い至り、深く考えている様子でした。

竹原さんは最後に「今日聞いた話をすぐに学校で実行しようとするのではなく、学校のニーズを受けて活動することが大切です。」と強調されました。そこに実践者として多様な体験をされての深い思いが込められているように感じられました。

【事例報告 はぐくみネット】

鶴見区の横堤小学校区のはぐくみネットコーディネーターから「小中学校協議会から生まれた小学校薬物教室」と題する報告がありました。1小1中の校区で、小・中合わせた学校協議会があり、その会議での話題から小学生に薬物の怖さを正しく知らせる必要性を感じ、各学年の成長に合わせた薬物教室を開催されたということでした。それまでも様々な行事や授業支援で子どもたちになじみのあった地域の皆さんが真剣に薬物の怖さを伝え、その後小学生向けに大阪府警が作成した薬物教室用のDVDを活用してわかりやすい説明を行ったところ、最初は硬かった子どもたちが徐々に様々な質問をするようになって、手ごたえを感じたという報告でした。大阪府警がこうした薬物教室用にDVDを作成し貸出していることを初めて知った参加者が多かったようでした。報告者は学校の要望（ニーズ・困っていること）を聞いて手伝っていくことが大事であると結ばれました。



【事例報告 学校元気アップ地域本部】

東淀川区の瑞光中学校の学校元気アップ地域本部事業の活動が報告されました。運営委員会は学期ごとに開催され、校区内小学校長も参加して小学校の様子も情報共有されているということでした。学習支援活動では放課後学習会や漢検学習会を実施したり、入試対策学習会に私立高校の先生を講師に招き、過去の入試問題で指導していただく機会を作ったり、図書館開放でもスタンプカードで生徒の意欲付けをして読書活動の推進をするなど、実態に合った工夫をされているということでした。毎月発行されている元気アップ便りは全校生徒と教職員だけでなく、各連合町会に配布・回覧してもらい、学校や生徒の様子が地域に伝わるように工夫されていました。課題はサポート人材の確保で、近隣大学の学生がボランティアとして参加してくれているが、大学の試験など時期によって人数に変動があって中学校側の予定とかみ合わないこともあることなので、年間を通じて変わりなく参加してもらえる地域のボランティアを獲得することが今後の課題である、ということでした。学校元気アップコーディネーターの参加者からは、この報告についての質疑応答をしたかった、という意見がアンケートにありました。



【ワークショップ】

実践事例報告の後、6つのグループに分かれてワークショップを行いました。

- ① 「育てたい子ども像」を各自で付箋に記入し、机上の白紙に貼り付け、似た内容をグルーピングしていく。「こういう子どもを育てるために何ができるか、地域として何ができるか」を違う色の付箋に記入する。
- ② 「地域の大人として、子どもに関わるときや学校に関わるときに大事にしたいこと、気を付けなければならないこと、ポイント」をみんなで標語やキーワードにして、短冊型の用紙に

書く。まとめの時間にグループ代表が前に出て短冊をホワイトボードに張り出し、なぜその標語にまとめたかを簡潔に説明・発表する。

各グループともたいへん和やかに、真剣に話し合いを進め、発表順はじゃんけんで決めて、発表に移りました。「自分を大切にすると人も大切にできる」「信じて見守って行動を待つ」「子どもたちのサインを見逃さない」「絶対に無くさせないよ自尊心」「子どもたちと仲良く」「言いたいことが言える関係を持とう」など、話し合いの経過を踏まえた標語を各グループが3点ずつ発表しました。

ワークショップの最後に竹原さんは「学校にはできないこと、行政にはできないことが地域からできることもある。それがセーフティーネットになる。地域の力はいざというときの力でもある。今日は立場の違う人が集まった。いろいろな人とつながってほしい。」とまとめられました。

